

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：10103

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2013

課題番号：23243072

研究課題名(和文) 災害時の効果的かつ実際的な心理社会的支援活動のための教育訓練プログラムの研究

研究課題名(英文) A Study of Education and Hands-on Training Program for effective and practical Psychosocial Support Activities in disaster settings

研究代表者

前田 潤 (MAEDA, Jun)

室蘭工業大学・工学(系)研究科(研究院)・准教授

研究者番号：90332478

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 17,900,000円、(間接経費) 5,370,000円

研究成果の概要(和文)：我が国の災害支援の専門機関である日本赤十字社(以下日赤)の災害時における心理社会的支援活動に着目し、その効果的な活動のための教育訓練プログラムを検討した。

教育プログラムには、遺族対応や中長期的支援が盛り込まれる必要があり、実施訓練も重要であることが支援活動に当たった日赤職員から指摘された。東日本大震災のような広域災害では、後方支援体制とニーズとのマッチング、中長期的支援体制が求められる。しかし、全国組織であり、我が国の災害支援の専門機関である日赤も財政、マンパワーに限界があり、ボランティアや他支援団体との協力体制が重要であることが東日本大震災の支援活動から明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The education and training program for effective support activities was examined to focus on Japan Red Cross Society that is our nation specialized organization for disaster relief activities.

It is clear and indicated by JRCS staff on support activities the necessity for educational program to include knowledge of bereavement and middle-and-long term support, especially hands-on training. It was also revealed the importance of cooperation system with volunteers and other support organizations because of the limitation of manpower and limitation of financial situation of JRCS even though logistics and administration support, matching between support and necessity and preparation of system for middle-and-long term support will be more important in wide area disaster.

Exploring and expanding support method toward to individual and group support was next issues.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：災害 心理社会的支援 教育訓練プログラム 東日本大震災 国際情報交換(デンマーク) 国際情報交換(中国) 国際情報交換(フィリピン) 国際情報交換(オーストラリア)

1. 研究開始当初の背景

災害支援で、「こころのケア」の重要性が知られ、我が国の災害支援専門機関である日本赤十字社(以下日赤)は、国際的にも先駆的に組織的な「こころのケア」教育を2003年から継続して行ってきた。国際連盟(以下 UN)は災害時における精神保健と心理社会的支援をますます重視し、各国へ指針としてガイドラインを示すようになった。しかし、災害支援における「こころのケア」活動については、日赤でも未だ十分な理解と活用が図られ、普及されているとは言えない実態がある。これは日赤の問題というよりも「こころのケア」を標榜する活動が持つ、固有の課題があるのではないかと考えられた。

2. 研究の目的

一般に、新しい概念や技術の普及と活用には、教育プログラムと教育方法、また訓練方法が重要となる。本研究では、日赤が「こころのケア」教育の普及を図るために行って来た教育手法や日赤が採用した「こころのケア」としての基本理念や活動内容に焦点を当てながら、実際の災害支援活動と教育プログラムの適合性、「こころのケア概念」の特性を問い、より実際的かつ効果的な教育プログラムを提案することを目的に計画された。

3. 研究の方法

当初、「こころのケア」教育を受けた日赤の要員にアンケートを実施することを中心に研究を進めていく予定であった。しかし、2011年3月に東日本大震災が発災、そして本研究課題の採択も再採択であったため、2011年11月から開始された。研究計画及び研究方法を大幅に改変し、初年度は研究分担者の増員を図り、研究方法としても日赤が東日本大震災で行ったこころのケア活動を支援しつつ、調査を行って実際例の收拾を図ることから始めた。その上で、こころのケア活動に携わった日赤の要員にアンケート調査を実施した。さらに日赤がプログラムを改訂したこころのケア要員養成研修や日赤の仮設住宅支援、中長期的支援の調査、外部からの被災地での支援活動とその検証を行い、教育プログラムの有効性と課題の検証を行なう。

4. 研究成果

(1) 東日本大震災での日赤支援活動事例から支援者支援体制

津波被害に見舞われた石巻市にある石巻赤十字病院は、管内で唯一稼働可能な病院となり、拠点病院として、日赤救護班や自衛隊、様々な医療福祉保健チームの受け入れと活動の調整を行うこととなった。衣食住や安否確認も十分でない中で、発災当初から石巻赤十字病院の職員は日頃の訓練に基づく支援活動の展開を図っていった。日赤はこころのケアセンターを立ち上げ、黒タッグ(ご遺体ご遺族

対応)エリアの担当者交代制を導入、さらに石巻赤十字病院職員を対象とするリフレッシュルームを開設し、支援者支援を図った。そこは派遣された日赤こころのケア要員の石巻赤十字病院における主たる活動場所となるとともに、利用率も高く、実際的かつ効果的な活動となった。

釜石市でも、職員のストレス緩和を目的に釜石市役所の一角にリラックスマームを設置した。しかし、自発的な積極的な利用はなく、利用してもらうために、職位の高い職員から健康管理目的に利用するよう促しが必要であった。すると利用した職員は次々と職位の下のものに利用を促すのであった。

支援者、特に自治体職員、は自らのリフレッシュやリラックスを顧慮し、求めることも少なく、外部の支援者は、利用しやすい促しの工夫が求められることが明らかとなった。

心理社会身体的支援

日赤のこころのケアは Psychological First Aid(PFA)と言われる被侵襲的かつ被災者に寄り添う支援を基本とする。しかし、寄り添うということだけでは、日赤といえども関わりを持つことは難しい。そこで日赤のこころのケア要員の多くは看護師なので、血圧計を持って、「血圧図りましょうか?」と尋ね自然な関わりを行うのであった。さらに東日本大震災で日赤のこころのケア要員は、ハンドケア、肩もみ、足浴、ホットアイマスク、アロマ、筋弛緩法などで被災者のストレス緩和に努め、被災者にも好評であった。

このようなアプローチは従来の心理社会的支援(Psycho Social Support:PSS)、という枠組みだけでなく、心理社会身体的支援(Psycho Social Physical Support:PSPS)とでも呼ぶような国際的にも新しい支援方法の枠組みを提供するものであり、積極的に公表されるべきものと捉えられた。

広域災害の支援体制

東日本大震災は、こころのケア教育が日赤に導入された2003年以来、初めて迎える大規模災害であり、広範囲な地域に同時に支援活動を展開せざるを得なくなった広域災害であった。こころのケア活動においても日赤は岩手県と宮城県にこころのケアセンターを置いた。岩手県では、内陸部の岩手県支部、宮城県では被災沿岸部の石巻赤十字病院、という二つのタイプのセンターを運営したのである。

宮城県のこころのケアセンターでは発災直後から石巻日赤の職員が GM となり全国から集結するこころのケア要員や様々な関係者や機関との調整を円滑に図ることができた。しかし、被災沿岸部の活動と宮城県支部、他県支部、本社との連絡調整が早期には特に困難で、後に再

調整が必要になった。一方、支部にセンターを置いた岩手県では、支部と本社あるいは、救護班を派遣している他県支部、本社との連絡調整は円滑であった。しかし、被災地で切れ目のない支援を行うための、機動力の確保、支援者間の引き継ぎ、他機関との連携が課題となった。

必要な支援を切れ目のなく、広範囲に多くの機関が円滑に実施するためには、情報収集および支援者間の引き継ぎ方法の改善、支援コーディネーターの育成、発災直後混乱期の暫定的指揮命令系統の整備、他機関との共通認識の形成と共同訓練が求められると考えられた。

新たな災害ストレス概念-組織ストレス

災害は一般に、被災地の時々刻々と変化するニーズに即応した支援を展開することが課題となる。広域災害では、支援活動を円滑に展開するために支援者間の引き継ぎ、災害現場と後方支援、日赤で言えば、支援者と支部、本社のコーディネーション、指揮命令系統等の整備、そして他機関との共同が課題となる。さらに日赤の支援も自治体や行政府との調整が必要になり、あるいはNPOなどの民間支援組織との調整も必要となる。これら支援活動に伴う支援組織上の課題は、すなわち、現場で支援に当たる支援者にとってストレスになるとともに、被災者にとっても支援の円滑な提供に関わる大きなストレス要因となりえる。

災害に関わるストレス要因に「組織ストレス」とでも呼ぶことが相応しいストレスに被災者も支援者も見舞われることを本研究として指摘した。通常の指揮命令系統から緊急時の指揮命令系統の円滑な切り替えだけでなく、予算の執行と完了手続きまでも含んだ、緊急体製造が広域災害においては必要となる。

他機関との連携 臨床心理士会

日赤は、全国の病院施設職員を救護班とし、奉仕団、ボランティアなど幅広い人員体制を有し、組織内の救護班員にこころのケア研修を実施することで、災害時におけるこころのケア活動を展開して来た。しかし、東日本大震災において日赤は心理学専門団体である日本臨床心理士会を日赤ボランティアとして迎え、共同支援体制の下で他団体としての臨床心理士と日赤のこころのケア要員が共同して被災地で活動することになった。

日赤のこころのケア要員のほとんどは看護師であり、相補的な関係によって円滑な支援につながった。また日赤は臨床心理士に機動力と活動の場を提供する役割を担い、臨床心理士は被災者に職能を發揮したのである。今後、日赤は心理学専門団体との教育研修が課題となる。

こころのケアの用語と概念について

東日本大震災では、日赤だけでなく、保健行政としても、NPO 団体も「こころのケア」に関わる支援活動を展開した。しかし、「こころのケア」という用語は精神医療や保健を表す場合と心理社会的支援を表す場合があるなど、団体間でニュアンスが異なって使用され、団体間で災害現場での活動に、差異が生まれ、混乱を来すこともあった。

日赤のこころのケア要員が、避難所で受け入れ拒否に合うことはなかったが、日赤は「こころのケア要員です」という自己紹介はせず「日赤です」と自己紹介するのだが、行政の精神保健班は「こころのケア班です」と紹介するので、「こころのケアはいらない」と拒否されるのである。また、行政のこころのケア班は精神科医がチームリーダーであるが、日赤は多くの場合看護師がチームリーダーで、話が噛み合わないということが生じるのであった。

そのため、「こころのケア」概念の共有や共同訓練が重要と思われる。

(2)こころのケア要員へのアンケート調査

東日本大震災後に、こころのケア要員として派遣された日赤職員 320 名を対象に、こころのケア活動の実際と教育研修の在り方について尋ねるアンケートを実施した。

結果から、実際の活動で効果が高いと感じたのは、「話し相手」になることや「血圧測定」「健康相談」で、これは日赤のこころの要員のほとんどが看護師であり、その専門性が反映したものと考えられた。その他に効果の実感が高かったのは「肩もみ」「リラクゼーション」「手浴・足浴」だが、活動頻度は少なかった。さらに「心理相談」「他機関とのミーティング」も有効と感じていた。教育研修では、模擬被災者を使用する研修に効果を強く感じていたので、多様な支援内容を含んだ模擬被災者を用いて行う教育研修が望ましいという結果となった。

また、派遣されたこころのケア要員はストレスを感じていたが上手に対処しているが、帰還後のサポート体制が十分でないことも示された。

日赤の教育研修の工夫と帰還後のこころのケア要員のサポート体制が必要である。

(3)改訂プログラムと最適化

日赤は 2013 年にこれまでのこころのケア指導者教育のプログラムを若干変更し、対象喪失と悲嘆、そして遺族対応を内容に加えた。また、相対的に、被災者対応およびこころのケアの実際での研修時間の延長を行い、東日本大震災で行われた取り組みから、被災地での支援者の一日の流れ、活動内容、時系列からみる活動の変遷、帰還後の推奨する過ごし方などを具体的に紹介するようになった。

また、心理社会的支援の教育訓練のアプリケーションの試作と最適化を行った。

(4)中長期的支援の実際と課題

東日本大震災以後に、日赤はこれまで経験しなかった中長期的支援を展開している。本研究では岩手県での仮設住宅団地集会所支援活動を調査した。

これによると日赤職員や日赤奉仕団、そして岩手県臨床心理士会、ボランティアが協力し、血圧測定や健康相談、お茶飲みや手作業、リラクゼーションを基本活動として、時にイベントも実施していた。

この日赤の中長期的支援活動には仮設住宅住人の約25%が参加したが、男性は参加者全体の3%で、圧倒的に女性参加者が多かった。参加者の90%は役立ち感を覚え、特に血圧測定、イベント、健康相談、リラクゼーションが好評であった。当初参加者は高血圧傾向を示していたが、2ヶ月後には落ち着き、体調不良の訴えもなくなっているという事実もあった。また、互いの声掛けも増えていた。一方、震災後2年を経ても現状への不満と将来への不安を述べる人も少なくない。しかし、活動場所と対象者も少なく、限られた人員での広域支援、支援の持続性が課題である。また、いつ終わるのかも課題となる。

さらに、日赤や民間団体、専門家らは被災地域の子供達の育成活動を試みており、本研究として一部主導、一部参加協力を図った。

(5)日赤ほか支援者への中長期的支援

被災者ばかりではなく、支援者に対する中長期的支援も重要な取り組みとなる。

本研究では、災害支援プログラムの開発に関わって、サイコドラマの災害支援への応用として日赤や災害後支援活動に携わった人へのワークショップを実施した。

開催場所は、北海道、秋田、岩手、宮城の日赤病院、日赤支部、沿岸地域で、日赤職員、スクールカウンセラー、その他が対象であった。サイコドラマのテーマとして震災を取り上げた訳ではなく、「楽しかった思い出」というテーマを投げかけたとしても、現在の生活や仕事に震災がもたらしている影響、或は災害体験が日頃出会う患者や家族にもたらしている影響を確認するような場面がテーマとして取り上げられていた。参加者にとって深い情緒的体験を提供する機会となり、支援者は同時に被災者であることもあり、支援活動を継続する上でも、辛い体験を受け止め、自らを癒す経験が支援者としても必要であることが示された。

(6)海外研究者・支援団体との研究交流(中国・フィリピン・デンマーク・オーストラリア)

海外でも自然災害被害に対して異なる文化の中でそれぞれの国情に従った支援活動が展開されている。本研究としては、中国の専門家と事例検討会、学会で研究交流、2013年の台風30号被害に対するフィリピン赤十字の支援活動を調査、また、国際赤十字連盟の心理社会的支援センター所長、メルボルンサイコドラマ研究所長を招聘し、岩手県、宮

城県、福島県などで東日本大震災での日赤の支援活動の視察及び支援者支援活動を行った。中国の復興支援の迅速さと徹底、継続、フィリピンの市民の赤十字への信頼と尊敬、ボランティアの活用が認められ、日本ではノルディック・ウォーキングを取り入れた仮設住宅生活支援が国際的にも特徴的で、外国人による直接的な支援活動も十分なコーディネートの下で有効であることが確認された。

(7)まとめ

東日本大地震では、こころのケア活動として日赤や他団体が支援を行ったが、概念と活動の共通理解が不十分で、支援者間そして被災者にも混乱を来す現状が認められた。こころのケア教育を受けて被災地に派遣された日赤要員は、こころのケア活動に効果を感じていたが、支援方法が限られており、多様な支援法をさらに普及させる必要がある。

大規模災害では、被災地の支援者への支援が重要である。多くの関係者と組織が関わることで組織ストレスも生じるので、円滑な支援のためにコーディネーターの育成が求められる。大規模災害では日赤も他機関との連携が充実した支援には必要となるので、日赤の多様な人材の活用と、他機関との連携を含む教育訓練体制が求められる。

中長期的支援、特に原発事故による被災者への継続的支援は今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

賈冉・前田潤、2008年四川大地震後の被災教員の経験とその特徴-震災5年目の現地インタビュー-、室蘭工業大学紀要、査読あり、第63号、2014、135-143。

(<http://ir.lib.muroran-it.ac.jp/dspace/handle/10258/2839>)

前田潤、心理社会的支援から見る中長期的支援、産業ストレス研究、査読あり、20巻、2013、337-340。

前田潤・齋藤和樹・槇島敏治、緊急事態での心理社会的支援体制(3)-東日本大震災における日本赤十字社震災直後例-、室蘭工業大学紀要、査読あり、第62号、2013、113-123。

(<http://ir.lib.muroran-it.ac.jp/dspace/handle/10258/2062>)

前田潤、震災復興に向けての心理劇、心理劇、査読あり、第17巻、2012、3-7。

齋藤和樹・前田潤・小澤康司・槇島敏治、避難所での活動、心理臨床の広場、依頼論文、第4巻、2012、16-17。

小澤康司、学校における緊急支援の経験から-準備・初期・中長期の支援-、子どもと学校臨床、依頼論文、第6号、2012、12-19。

〔学会発表〕(計 20 件)

前田潤、喪失と悲嘆、トラウマワークのための普及型サイコドラマ その1、日本集団精神療法学会 第 31 回大会、2014.3.22、日本赤十字看護大学(東京都広尾)。

Jun Maeda、The constitutive Psychodrama by Clark Baim for Loss and Grief,Trauma,9th IAGP Pacific Rim Regional Congress/2nd Chinese Group Counseling and Group Psychotherapy Conference、2014.3.21、北京精華大学(中国北京)。

前田潤、心的外傷後成長(PTG)について考える-指定討論、東北大学復興アクション・講演・シンポジウム、2013.12.22、仙台国際センター(宮城県仙台市)。

青柳宏・齋藤和樹・前田潤、東日本大震災での心理社会的支援活動-研修の在り方とこころのケア活動の実態、第 49 回日本赤十字医学会総会、2013.10.18、和歌山国際センター(和歌山県和歌山市)。

Hidenori Suto・Ruediger Oehmann、A study of the Crossroad Game for Improving the Teamwork of Students、HCI International 2013、2013.7.26、Mirage Hotel(Las Vegas,USA)。

前田潤・齋藤和樹、日本紅十字会支援研修-由国際紅十字会手冊为基础的心理护理研修、第 4 回日中災害事例研究会、2013.5.9、北川教師研修学校(中国四川省北川)。

須藤秀紹、演習におけるチームワーク向上のためのソーシャルゲームの開発、第 40 回知能システムシンポジウム、2013.3.14、京都工芸繊維大学(京都市)。

前田潤・齋藤和樹・槇島敏治、東日本大震災から学ぶ広域支援体制の課題 - 岩手県および宮城県の赤十字こころのケア活動から -、第 18 回日本集団災害医学会総会・学術集会、2013.1.17、神戸国際会議場(神戸市)。

前田潤・齋藤和樹・槇島敏治、心のケア・こころのケア-その実情を整理する-、日本トラウマティック・ストレス学会第 11 回大会、2012.6.10、クローバープラザセンター(福岡県春日市)。

齋藤和樹、前田潤、小澤康司、槇島敏治、東日本大震災後の心理社会的支援の在り方の検討、日本トラウマティック・ストレス学会第 11 回大会、2012.6.10、クローバープラザセンター(福岡県春日市)。

Jun Maeda、From Global Anxiety towards a Future of our own、A one day conference on the 5th May 2012、2012.5.5、the Abbotsford Convent(Melbourne Australia)

小林正幸、子どものこころを支える学校の今とこれから-東日本大震災から 1 年

が経過して、日本学校メンタルヘルス学会第 15 回大会 大会長講演、2012.3.11、代々木オリンピックセンター(東京都)。
前田潤・齋藤和樹、国際赤十字による災害援助、第 3 回日中災害事例研究会、2011.12.25、成都師範大学(中国成都)。
前田潤、災害時のこころのケア、日本フーマシューティカル学会、2011.11.27、金城学園大学(愛知県名古屋市)。

〔図書〕(計 1 件)

全国赤十字臨床心理技術者の会編 齋藤和樹・前田潤・池田美樹編著、勁草書房、総合病院の心理臨床 赤十字の実践、2013、261 ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前田潤 (MAEDA Jun)
室蘭工業大学・工学研究科・准教授
研究者番号：9 0 3 3 2 4 7 8

(2) 研究分担者

齋藤和樹 (SAITO Kazuki)
日本赤十字社秋田看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：5 0 2 8 9 7 6 6

青柳宏 (AOYAGI Hiroshi)
文化学園大学・現代文化部・教授
研究者番号：3 0 3 5 2 4 8 8

須藤秀紹 (SUTO Hidenori)
室蘭工業大学・工学研究科・准教授
研究者番号：9 0 3 5 2 5 2 5

小林正幸 (KOBAYASHI Masayuki)
東京学芸大学・教育学研究科・教授
研究者番号：7 0 2 7 2 6 2 2

小澤康司 (OZAWA Yasuji)
立正大学・心理学部・教授
研究者番号：0 0 3 0 5 9 3 9

佐藤由佳利 (SATO YUKARI)
北海道教育大学・教育学研究科・教授
研究者番号：7 0 3 3 3 6 5 6

生田倫子 (IKUTA Michiko)
神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・講師
研究者番号：1 0 3 8 6 3 8 6

渡邊誠 (WATANABE Makoto)
北海道大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：8 0 2 0 1 2 2 6